

「もっとウキを知りたい～基本を覚えて使い分けよう～ウキ戦術～」

## 第7章 新底ダテフロートとその製作方法

もう春になる。これからは乗っ込み本番となり、巨ベラを狙って浅場の底釣りをする人が多くなるだろう。

底釣りはあらゆる釣り場、あらゆる季節に有効で、1年中この釣りをやる人が多い。しかし、初心者にとっては「底立てが面倒」ということで、敬遠されることもある。特に、サオ先からウキまでが遠い「沖底」の場合は、どうしても正確な底立てが難しい。

そこで今回は「尽心作」作者・北村滋朗氏に、「表面張力を利用した底立て」と「新たなフロート」の紹介、その製作方法について解説してもらう。

### はじめに

釣りには「基準」を持つことが大切だ。基準のエサ、基準の仕掛け、基準のウキ、基準のエサ落ち目盛りなど、基準を持つことによって釣りの土台ができ、迷いなく釣り進むことができるからだ。

特に底釣りでは水深測定、つまり「底立て」が必要不可欠。しかし、自分の基準、あるいは一般的な基準で底立てをしても、どうしても正確に水深を測れないという人は多い。そういう方々には、これから紹介する「新たな底立て」を試していただけたらと思う。

その水深の測り方は「表面張力」を逆手にとった方法で、これまで手間がかかっていた底立てが変わると確信している。

### 表面張力を利用した水深の測り方について

水深がそれほど深くない管理釣り場や釣り堀、野池などで底釣りをする場合、サオ先からウキまでの距離が遠くなる。

サオ先からウキまでの距離が遠い状況で水深を測ると、竿先をアオッてウキとタナ取りゴムが垂直になるようにすることが難しいため、ウキからタナ取りゴムまでのミチイトが斜めになってしまうことが多く、正確な水深を測ることが難しい。しかし紹介する底立ては、ミチイトが斜めになることなく、水深を測ることができる。

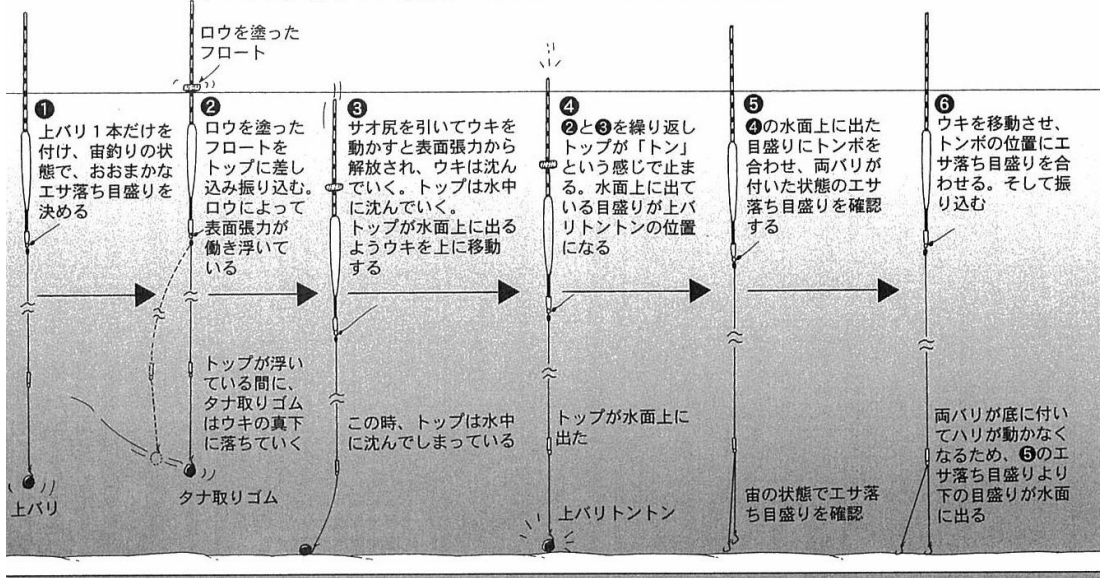
私のホームページ（URL:[www.yahoo.co.jp/geocities/jsyhg851/](http://www.yahoo.co.jp/geocities/jsyhg851/)）では動画で使い方の説明を行っているので、そちらも参考にさせていただきたい。

具体的方法は次の通り

- ①上バリだけを付け、宙の状態でエサ落ち目盛りを決める
- ②ロウソクのロウを塗ったフロート（バルサ材）をトップに差し込み、ハリにタナ取りゴムを付けて振り込む。ロウを塗ったフロートは、沈んでしまうほどのタナ取りゴムを有しながらも、表面張力により浮いている。この浮いている間にミチイトが真っすぐに張る
- ③サオ尻を引いてウキを動かすと表面張力から開放され、ウキは沈んでいく。トップ先端1目盛りが水面上に出るように、ウキを上を移動する
- ④何度か②と③を繰り返すと、タナ取りゴムが底に付いて「トンッ」といった感じで止まる。止まった目盛りの位置が上バリトントン＝水深となる。
- ⑤水面上に出た目盛りにトンボを合わせる。そのトンボの位置が水深の目印。ここで下バリを付けてウキを下げ（浅くして）、宙の状態で両バリがあるときの正確なエサ落ち目盛りを確認する。
- ⑥ウキを上げてトンボの位置にエサ落ち目盛りを合わせると、上バリトントンのタナになる。振り込んで上下のハリが底に付くと両方のハリの重さがなくなるため、エサ落ち目盛りよりもわずかに下の目盛りが出る

図 1

図 1 ●表面張力を利用した底ダテ（バランスの底釣り）

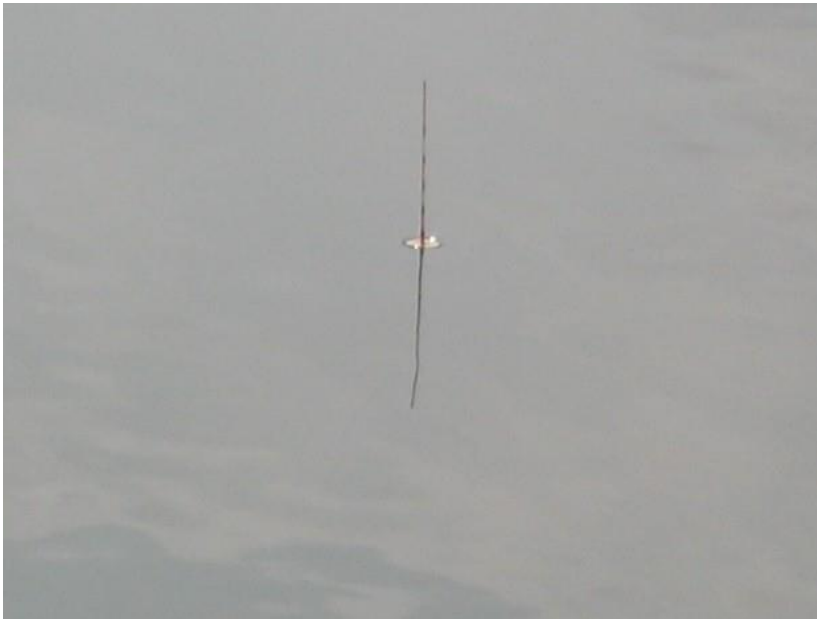




フロートの本体はバルサで、中に外径1.4mm、内径1.0mmのウレタンチューブを入れている。このバルサ材部分にロウソクのロウを塗る。真ん中のウレタンチューブは、フロートをウキのトップに固定するためのもので、5mmほど上部に出している。これによって確実にトップに固定することができる。



フロートをウキのトップに入れる。このとき、トップの先端から3分の2くらい下にフロートがくるようにする。ウレタンチューブの径が細くてトップが通らない場合、もしくは、チューブの方が太いためにフロートをトップに固定できない場合には、太さの異なるウレタンチューブが付いたものと交換する



ロウを塗ったフロートは、沈んでしまうほどのタナ取りゴムを有しながらも、表面張力により浮いている。この浮いている間に、ミチイトが真っ直ぐに張る（イラスト1の②参照）



サオ尻を引いて表面張力を開放すると、ウキは沈んでいく。トップ先端1目盛りが水面に出るように、ウキを上移動する（イラスト1の③参照）



タナ取りゴムが底に付いて「トン」という感じでトップが止まる。そのとき水面上に出ている目盛りの位置が、上バリトントン=水深となる（イラスト1の④参照）

### 原理の解説

フロートにロウを塗って表面張力を強くし、その力を利用して、ミチイトが真っすぐになるまで沈ませないようにする。水深により異なるが、おおよそ15を数えた後、ミチイトが真っすぐになったのを見計らい、サオ尻を引いてウキを動かし、表面張力を開放し、ミチイトが真っすぐの状態でも水深を測る。

この方法を用いると、ウキとタナ取りゴムが垂直になるため、トップの目盛り単位で正確に水深を測ることができる。

また、底にへドロがあるときは、いったんトップ「トンッ」と止まってから、さらに「ズルズル」と沈んでいくので容易に判断がつく。

この底立て方法の弱点は風流れ。強く水面が波立つ場合には、表面張力が消されてしまうため使用できない。

また、底立てがうまくいかない原因の大半は、タナ取りゴムが大きすぎることである。そのため、ウキがゆっくりと沈むタナ取りゴムを使うことがコツとなる。

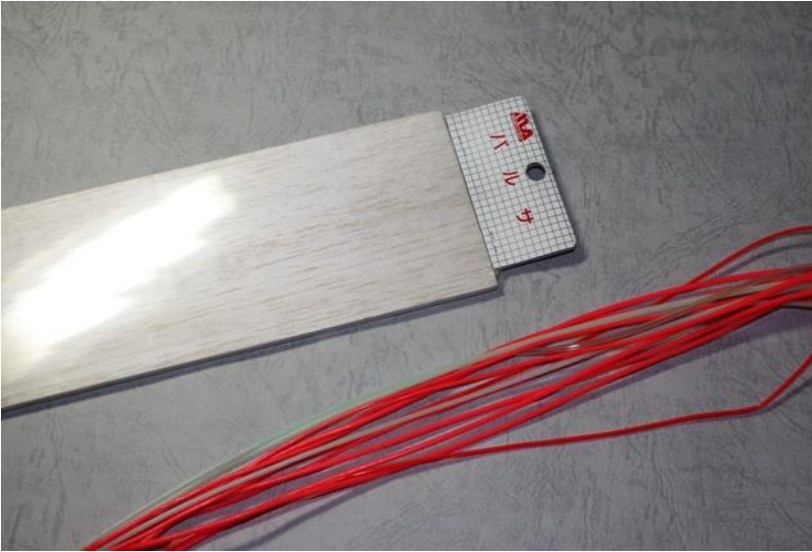
このフロートは手づくりのため、製作しやすいバルサ材とウレタンチューブを材料にしているが、プラスチックなどを使えば、蠟を塗る表面にギザギザを付けたり、トップを固定するチューブをゴムに変えたりすることで、さらに性能の向上が見込まれる。なおかつ、量産することもできるだろう。このフロー

トの原理は、実用登録新案特許に登録済みである。

## フロートの製作方法

では、このフロートをつくるための材料とつくり方を、写真で紹介していこう。

### 1・材料



3mm厚のバルサ材（上）と外径1.8mm内径1.4mm、外径1.4mm内径1.0mm、外径1.2mm内径0.8mmの3種類のウレタンチューブ。バルサ以外にほう材、桐材でも可能。材質は重要ではない

### 2・工具



埋め木用木工ドリル・全体の写真



埋め木用木工ドリル・刃先のアップ

### 3・製作手順工具



①ボール盤にバルサ材を固定し、埋め木用木工ドリルでバルサ材をくり抜いていく



②くり抜いたときにできる周りの「バリ」(ギザギザ)を紙ヤスリで削って整える





「尽心工房」では、この段階で銘を入れる



キリでセンターに穴を開ける



キリであけた穴を精密ヤスリで削り、ウレタンチューブの径と合せ、ウレタンチューブが通るように仕上げる



長さ約10mmにカットしたウレタンチューブを穴に通して、バルサ材とウレタンチューブの接合点に瞬間接着剤を付け固定する



ヘラウキのボディの塗装で使用している「エンジンウレタン」で2回程度塗装すれば完成